

1. からすき

牛に引かせて田畑を耕す道具で、動力耕耘機の普及する 1960 年代まで広く使われていた。古く朝鮮半島や中国から伝来したものでカラスキ（唐鋤）と呼んだらしい。

カラスキ（犁）と改良カラスキ

A は摂津市域で昔から使われてきた型のカラスキ（犁）で、床が長いので農学分野では長床犁（ちょうしょうり、ちょうしょうすき）という。犁床 82 cm、全長 242 cm。

B は明治の中頃から大正時代にかけて開発されたタイプで、農学分野では近代短床犁（きんだいたんしょうり、きんだいたんしょうすき）と呼ばれており、摂津市域ではカイリョウカラスキ（改良犁）と呼んだ。犁床 47 cm、全長 171 cmで「青木式進耕犁」と焼印。

C は「摂津国各郡農具略図」の明治のカラスキで、まだ長床犁しかなかった。

昔はもっと大きかった

昔のカラスキ（長床犁）はもっと大きかったと聞く。「おじいさんの代（明治の中期～後半）のは1丈（3 m）ほどあった」（別府）「トコ（犁床）は1 mほど」（鳥飼）。三島のお宅の軒下には犁床 70 cmのものと 90 cmのものがあり、大きい方が朽ちていた。

昔のカラスキに出会う

D は鳥飼上の I 氏の納屋の梁から下ろしてもらった犁。犁床 105 cm、全長 309 cmで、1丈を超える“昔のカラスキ”だ。バネバカリを忘れたという米俵用のチギ（竿秤）に難なく吊るして「5貫700匁や」。つまり 21.4 kgで犁床 70 cm級の犁に比べて約 1.4 倍の重さである。小柄な明治・大正の人はこんな大きなカラスキを器用に操っていたのだ。

カラスキヤが作る

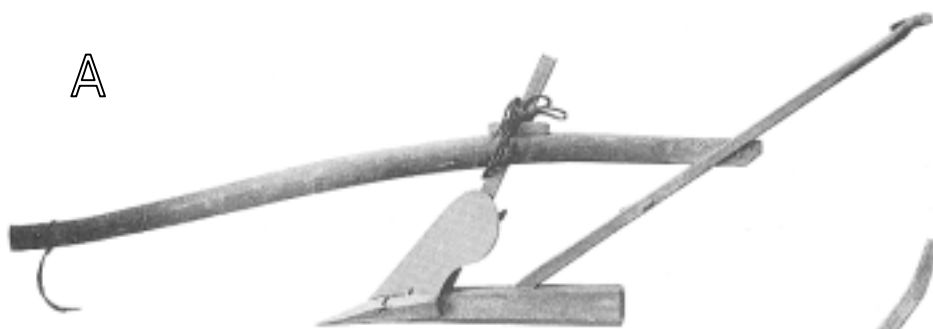
カラスキ（長床犁）はどこで買ったかと聞くと、吹田の天道のカラスキヤと答える人が多い。寝屋川の太間にもカラスキヤがあって鳥飼では材料のケヤキの木を売ったこともあった。また味舌下の農家で犁作りを習って注文生産した人もあったという。鳥飼下にも農家で犁を作る人がいたと聞いた。長柄の下のアマ、茨木の大田でも作ったと聞いた。

短床犁は工場製で、摂津市域では全国メーカー製では三重県名張の高北式と熊本県東洋社の日の本号、それに中小メーカー製と思われる青木式が寄贈されている。

カラスキは古代語

カラスキとは奈良時代の『歌経標式』にすでに見える言葉で、関西ではこの古語を 1200 年来使いつづけてきた。百科辞典では「すき（犁）」として出ているが、これは犁をスキと呼ぶ九州の方言が明治時代に関東に広められたため、本来はカラスキが正しい。

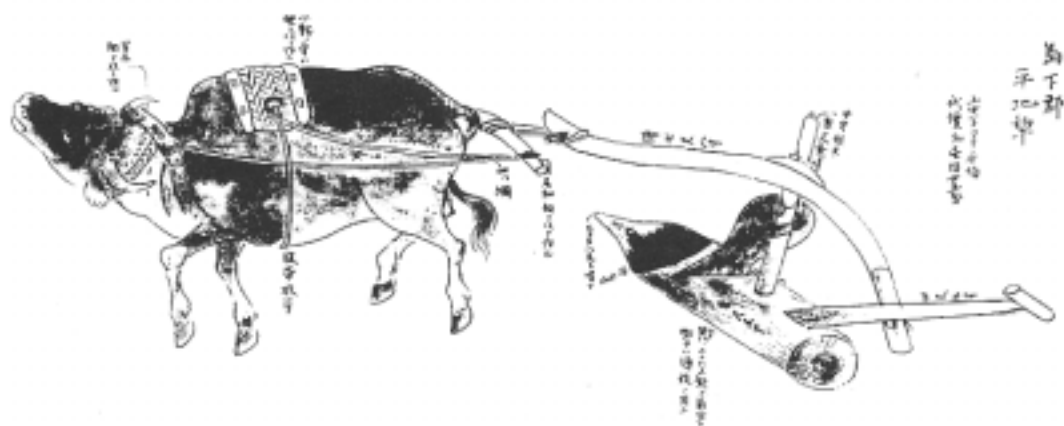
A



B



C



D

